

高校生の宗教意識に関する研究 (2)

——家の宗教との関係——

石黒 鈺二
酒井 亮爾
山田 ゆかり

一、目的

この研究の目的は高校生の宗教意識について、高校生自身が認知している家の宗教とそれがどのような関係にあるかを、質問紙調査によって明らかにすることである。

特別に宗教教育を実施している私立高校の生徒の場合を除き、一般の高校生の宗教意識の形成は、家庭や社会による無意図的、または偶発的な教育作用に依存するところが大きい。わが国では歴史的にみて、神道も仏教も一般に個人の宗教として考えられず、地域社会と結びついて地域の安全と繁昌を祈願する神社神道、家と結びついて死者の鎮魂と撰災を祈禱する仏教というように町村や家の宗教という色彩が強い。

高校生の宗教意識に関する研究(2) (石黒・酒井・山田)

い。そして病・貧・争などの苦しみの除去や成功や富の獲得に関する個人的願望は、その呪術的側面と結びつくにすぎないという傾向がみられる。

日本の公立学校では、前述(一九八五b)のように、その教育において宗教にふれることを故意に避けている風があり、宗教ぬきの教育(無・宗教教育)の状態であるから、高校生の宗教意識に対する家庭や社会の宗教的環境の影響は、逆に大きな比重を占めることになるであろう。しかし核家族化が進み、地域住民の移動が多い都市においては、伝統的宗教は個々の都市生活者に対する影響力あるいはそのかかえる悩み・苦しみ・不安に対応する力をあまり持ち合わせていないと言われる。そこでこの願望にこたえるものとして新宗教

が生まれ、その教義が必ずしも体系化されていないと批判されながら、多くの信者を獲得してきたのである。その契機となったものは、人々の生活に密着したところで行なわれる野外伝道、家庭法座、コミュニティ集会などの積極的な宗教活動であり、それを媒介として人々の心に現世利益的・实际的な信条と結びついた信仰を育てたと思われる。

ところで家庭内で行なわれる宗教教育は、地域社会との関連に共通性をもつとしても、その家族構成や家族の信奉する宗教宗派に基づく宗教行事への参加などの差異によって、宗教意識の形成上異なった効果をもたらすものと考えられる。ここではそのような見地から、高校生が仏教や新宗教を家の宗教として明白に認知している場合と、家の宗教をほとんど関知しない場合について、その宗教意識の調査結果を比較検討することとする。

二、方法

さきに作成した宗教意識の調査項目(一九八四)について、再検討した結果の分析により四項目を削除して、調査A二五問、調査B一六問、合計四一問の質問項目について調査結果を分析する。削除した項目はA2、3、14(いずれも条

件付き命題)とB12(他項目との相関がほとんど認められない)であった。調査Aは宗教的信念と信仰に係り、調査Bは宗教的実践に係る質問によって構成されている。調査項目及びその質問形式は前報告(一九八五b)を参照されたい。

調査対象は愛知・奈良・東京の五校(愛知はA・N・M、奈良はH、東京はK)で、男女別人数は表1に示す。また高校生自身が報告した家の宗教は表2に示す。表1にみられるように、無応答またはでたらめ応答と認められ、無効として除去された用紙は全体の2%にすぎない。調査対象の高校生がこの調査に対して協力的であったと言える。

ここで家の宗教による比較の対象となった高校生は表2のうち人数の多い「仏教群」四六二名、「新宗教群」八九名、「なし群」一二三名である。新宗教には天理教、金光教、創価学会、ピエール、世界救世教、立正佼正会、生長の家などが含まれる。「なし」には無記入、わからない、なしの応答が含まれるが、「知られたくない」として拒否するものは大抵除去された無効応答に含まれると考えられるので、「なし」は無知・無関心または家で宗教活動がみられないというものが大多数とみてよからう。便宜上これを「無宗教群」と

表 1. 調査対象 (人数)

高 校	男 子		女 子		計		合計
	有効	無効	有効	無効	有効	無効	
N	75	0	55	0	130	0	130
H	70	2	142	6	212	8	220
M	73	3	74	4	147	7	154
A	135	0	—	—	135	0	135
K	—	—	127	0	127	0	127
計	353	5	398	10	751	15	766
百分比	98.6	1.4	97.5	2.5	98.0	2.0	100

表 2. 家の宗教 (有効回答のみ：%)

性 別	男子	女子	合計
人 数	353	398	751
仏 教	68.0	55.8	61.5
神 道	2.8	4.3	3.6
キリシタン	3.1	6.0	4.6
新興宗教	1.7	2.2	2.0
その他	11.1	12.6	11.9
無回答	13.3	19.1	16.4

呼ぶことにする。ただしそれは高校生自身が認知していることであって、家族が全く無宗教であるとは限らない。なお表1のA校とK校は宗教教育を実施している仏教系の私立高校である。

調査者は大部分研究者自身であるが、一部の対象校ではそ

高校生の宗教意識に関する研究(2) (石黒・酒井・山田)

の学校の都合により先生方の援助を受けた場合もある。調査期日はN校(一九八三年三月)、H校(一九八四年三月)、M校(一九八五年二月)、A校(一九八四年七月)、K校(一九八五年二月)である。

三、結果と考察

(一) 宗教意識の因子構造

宗教意識は多次元の宗教経験の複合体であって、それは内面的な知的・イデオロギー的次元と経験的・儀礼的次元に分けられる。前者を宗教的信念と信仰、後者を宗教的实践という。従来の研究から、前者は五個の領域(一般的宗教的信念、宗教的信条の認否、宗教と科学、信仰、寺院・神社、教会)の意義と役割)を含み、後者は四個の領域(宗教経験、個人的宗教的行為、宗教儀礼への参加、呪術)を含むと考えられている。この調査においてもこの視点から各領域にわたる質問項目を選定して質問紙を構成している。しかしさきの調査(一九八五、一九八六)で高校生においても因子分析の結果は、必ずしも各領域の質問項目に対応する因子が抽出されないで、二三の領域の質問項目が混交して一因子を構成する場合がしばしばみられた。また地域間、男女間、学年段階

表 3-1 因子分析の結果 (バリマックス回転後)

*印は逆転項目

因子	項 目	1	2	3	h ²
信 仰	1. 神 (仏) をまったく信じないという考えは、社会にとって有害である。	.43	.20	.01	.22
	2. 宗教を信じていれば、死が近づいたときにも安心感をたもつことができる。	.49	.21	.07	.29
	3. 多くのむずかしい問題は神 (仏) に祈ることによって解決される。	.50	.35	-.05	.38
	4. ほんとうに信心深い人は、生活のあらゆる面で道徳的な行動をしようとしている。	.41	.15	.02	.19
	5. 信仰について迷っている人を助けることは、私の義務だと思っている。	.62	.16	-.02	.41
	6. 寺院 (神社, 教会) の奉仕活動をするのは、私のたのしみである。	.67	.02	.11	.46
	7. 寺院 (神社, 教会) は社会の人間関係をよくするのに、一番重要な場所である。	.69	.13	-.08	.51
	8. 寺院 (神社, 教会) は安息の場所、生活の苦しみをのがれる場所である。	.65	.08	-.06	.44
	9. 結婚式は寺院 (神社, 教会) であるのが一番よいと思う。	.39	.21	-.04	.20
	10. *寺院 (神社, 教会) は古くさい教義と中世的な迷信をたくさん押しつけようとしている。	-.41	-.08	-.40	.34
	11. 寺院 (神社, 教会) は個人や社会の正義を守り、押し進めるための強力なとりでである。	.48	.28	-.11	.32
	12. *寺院 (神社, 教会) は人の心を救うのに、十分なことをしているとは思わない。	-.47	-.14	-.20	.28
宗 教 的 信 念	13. 私は神 (仏) があると信じている。	.29	.62	.33	.58
	14. 私はある人々が神 (仏) と言い、他の人々が天と言うものが、私よりも大きな力を持っていると信じている。	.17	.43	.28	.29
	15. 人の一生は生まれたときから運命によってきめられている。	.04	.41	-.15	.19
	16. 人間の魂は死んだ後にも残ると思う。	.08	.52	0.4	.28
	17. 私はほんとうに天国 (極楽) と地獄があると思う。	.16	.55	.06	.34
	18. 神 (仏) は信心深く生活する人に報いてくれる。	.39	.53	.09	.44
	19. 私は神 (仏) がいつも慈愛をもって守ってくれていると思っている。	.35	.59	.18	.51
	20. 私は神 (仏) の救いによって罪をゆるされ、新しい生活が自由にできるようになると信じて				

高校生の宗教意識に関する研究(2) (石黒・酒井・山田)

	いる。	.37	.51	.03	.40
	21.*人は神(仏)を信じなくても、幸福で楽しい生活を送ることができると思う。	-.35	-.36	-.19	.29
宗教と科学	22. 人は生まれつき罪深く、けがれたものである。	.08	.12	-.33	.13
	23. 進化論は道理に合わない考えであって、社会に害毒を流す。	.10	.36	-.28	.21
	24.*科学が進歩すれば、神秘的(ふしぎ)なものはすべて説明がつくようになる。	.10	-.16	-.36	.17
	25.*宗教は科学的に考えることをさまたげる。	-.20	-.15	-.29	.15
因子寄与		4.11	2.96	.94	

表 3-2 因子分析の結果 (バリマックス回転後)

因子	項目	1	2	3	h ²
宗教経験	1. 私は何らかの形(人間の姿やそれ以外のもの)で、神(仏)が実際にあると感ずる。	.66	.13	.14	.48
	2. 私は神(仏)の助けを受けていると感ずる。	.65	.17	.23	.50
	3. 私は何か変わったことがあったとき、神(仏)の恐ろしさを感じずる。	.72	.15	.06	.55
	4. 私は自分に何か悪いことが起こったとき、神(仏)の罰を受けたのではないかと感ずる。	.71	.12	.15	.55
	5. 私は悪魔に誘惑されているのではないかとという気がする。	.38	.11	.00	.16
宗教的行為	6. 友人や近所の人や勉強仲間と、宗教のことについて話し合う。	.19	.51	-.13	.32
	7. 家族に、自分の信仰や宗教活動について話す。	.25	.59	-.10	.42
	8. 聖書や経典など、宗教に関係のある本を読む。	.07	.73	.12	.56
	9. いろいろな出来事を宗教に関係させて考える。	.40	.44	.06	.36
	10. 宗教団体の募金運動があるとき、進んで献金する。	.11	.28	.20	.13
	11. 宗教上のきまった日(祭日など)には寺院(神社、教会)に行く。	.14	.54	.11	.32
	12. 寺院(神社、教会)でおこなっているお勤めや修行など、宗教的行事に参加する。	.04	.67	.17	.48
祖先祭祀と呪術	13. 宗教上のきまった日に墓参りをする。	.06	.14	.41	.19
	14. 身の安全や入試合格などの祈願のため寺院(神社、教会)に行く。	.17	.03	.68	.50
	15. おみぐじや占いをする。	.07	-.01	.65	.42
	16. お守りやおふだなど、魔よけや縁起ものを自分の身のまわりにつけている。	.08	.01	.64	.42
因子寄与		2.38	2.29	1.69	

間にも因子を構成する項目の異同が認められた。

そこでまずわが国の高校生について再検討し、その因子構造を明確にした上で、宗教意識の比較分析を進めることにする。前述の41項目すなわち宗教的信念と信仰25項目、宗教的実践16項目について、それぞれ主因子解を施し、バリマックス回転を行なった。その結果を示したものが表3-1及び3-2である。因子をまとめるに当たっては、項目の負荷量40以上を基準としたが、全体との関連から30以上の項目をも含めた場合がある。

このようにして得られた因子は、宗教的信念と信仰(表3-1)においては第一因子「信仰と寺院・教会の機能」(以下「信仰」と呼ぶ)、と第二因子「宗教的信念と信条の認否」(以下「宗教的信念」と呼ぶ)及び第三因子「宗教と科学」の三因子である。「宗教と科学」は因子寄与が低いので、日本の高校生に限定して考えれば除外するのが適当であろう。しかし米国の大学生(一九八四)や台湾の高校生(一九八六a)では「宗教と科学」の因子寄与が高いので、ここに含まれる四項目が宗教意識を知る手がかりとして無意味とは言えないであろう。そのような理由から、ここではこの因子を含めて検討することにした。

次に宗教的実践(表3-2)においては、第一因子「宗教経験」、第二因子「個人的宗教的行為と宗教儀礼」(以下「宗教的行為」と呼ぶ)、第三因子「祖先祭祀と呪術」の三因子である。墓参が宗教的行為の因子にはいらず、呪術と結びついて一因子をなしていることが注目される。墓参が宗教的行為としては異質のものであることは、増谷文雄(一九七五)も指摘しており、前の調査(九八五a)でも呪術との結びつきがかなり認められていたのである。

次に宗教的実践が宗教的信念と信仰をどれほど裏付けとして持っているかを知るために調査Aと調査Bの項目間の相関を調べて表4に示す。相関係数の信頼限界は、人数が四〇〇のとき、信頼水準〇・〇五とすれば、 $r = 1(0 \sim 2)$, $r = 15(06 \sim 24)$, $r = 2(12 \sim 29)$, $r = 3(22 \sim 38)$ である。そこで「項目間の相関係数15以上」という基準を設定して、それに該当する項目を表示した。調査Aの項目とBの項目の相関が高いということが両項目間の因果関係を示すとはいえないが、両者が密接な共存関係にあることは確かである。A 10、12、21、24、25の五項目はいずれも逆転項目であるから、相関係数は負となってあらわれている。

宗教的信念や信仰と相関のほとんどみられない宗教実践の

表4 「宗教的信念と信仰」と「宗教的実践」との項目間の相関

因子	宗教経験					宗教的行為						祖先祭祀と呪術					
	1 神仏の実在を感じる	2 神仏の助けを感じる	3 神仏の恐ろしさを感じる	4 神仏の罰を感じる	5 悪魔の誘惑を感じる	6 友人や隣人と宗教を語る	7 家族に自分の宗教活動を話す	8 聖書や経典を読む	9 事件と宗教の関係を考える	10 宗教団体の募金に応ずる	11 祭日などに寺院に行く	12 寺院の宗教行事に参加	13 宗教上のきまつた日に墓参	14 安全や入試合格を祈願	15 おみくじや占いをする	16 お守りやおふだを身につける	
調査B 調査A	1	.21	.17	.15	.20				.15								
	2	.23	.26	.24	.22				.18					.19			
	3	.22	.27	.18	.20		.18		.18		.21	.19		.21			
	4	.21	.25	.17	.20			.17	.17					.15			
	5	.20	.22		.16		.19		.21	.20	.18	.18					
	6	.16	.23	.15	.18	.18	.24	.21	.20	.22	.23	.19		.17			
	7	.16	.23		.16				.16		.15			.15			
	8		.21					.15						.21		.17	
	9			.15						.16		.15	.16	.25	.16	.23	
	10	-.21	-.21					-.20	-.22		-.17	-.18		-.18		-.19	
	11	.16	.19	.16	.15									.26			
	12		-.21								-.18			-.15			
信 仰	13	.46	.46	.34	.38	.16		.22	.15	.27	.15	.17	.18		.32	.20	.21
	14	.26	.23	.20	.23					.20					.19		
	15		.17		.17									.18	.15		
	16	.25	.25	.24	.23			.15	.18					.21	.21	.18	
	17	.28	.29	.21	.21				.15					.23	.22	.17	
	18	.23	.32	.22	.24				.20			.16		.28		.16	
	19	.37	.48	.23	.26		.18		.26	.16	.19	.17	.18	.34	.18	.27	
	20	.29	.35	.20	.21		.17		.17	.17				.22		.18	
	21	-.28	-.30	-.21	-.23				-.20		-.15			-.17			
宗教と科学	22																
	23																
	24	-.17															
	25	-.17	-.16						-.15								

注. 有意水準 .025+0.25=.05のときの信頼限界

N=400ならば

.1 0~.2, .15 .06~.24, .2 .12~.29, .3 .22~.38

項目には、B 5「悪魔の誘惑を感ずる」B 6「友人や隣人と宗教を語る」B 13「宗教上のきまつた日に墓参」がある。お彼岸やお盆にお墓参りをすることは多く、明らかに宗教儀礼の一種と考えられるが、高校生は既成宗教の宗教儀礼とは異なる意識でこれに参加しているのかもしれない。ここで注目されるのは呪術のB 14「安全や入試合格祈願」やB 16「お守りやおふだを身につける」が、低いけれども信仰や宗教的信念のかなり多くの項目との間に相関をもつことである。これは先の調査報告(一九八五a、一九八五b)とやや異なる。調査対象の人数が増して低い相関係数も有意と認められるようになったために明らかになったことであるが、高校生もこれらの呪術—宗教的行為を全く宗教的信念や信仰の裏付けなしに行なっているわけではないことがわかる。

次に逆に宗教的实践と関係のうすい宗教的信念や信仰の項目は、A 22「人は生まれつき罪深い」A 23「進化論は社会に有害である」A 24「科学の進歩は神秘性を解消」の三項目でいずれも「宗教と科学」に属する項目である。A 22はキリスト教の原罪に関するものであるが、わが国でも「宿世の罪業」を阿弥陀の願力によって解放する(親鸞)とか、罪やけがれを禊や祓いによって清めると言うこともある。しかしわ

が国の現代の大多数の高校生(一九八五b)では、このような意識がきわめて低い。A 23の進化論は、キリスト教の旧約聖書にもられた天地創造説と矛盾対立するが、わが国では、仏教でも神道でもそのような矛盾をきびしく感じさせる教義をもたない。高校生の宗教的实践において科学との相関がほとんど認められないのはそのためであろう。

このようにわが国の高校生の宗教意識を問題とするとき、調査Aの第三因子「宗教と科学」を残す必要はなさそうであるが、カナダ(一九八六b)や台湾(一九八六a)など他国の青年と比較対照する資料としては意義があると考えて、ここでは分析の対象として取り扱うことにする。

(二) 家の宗教による宗教意識の差異

(1) 項目別各群の比較

仏教・新宗教・無宗教の各群の応答を項目別に集計して比較したものが、表5-1、5-2である。調査A(5-1)では、非常に賛成と賛成を合わせて十とし、どちらでもないを0、非常に反対と反対を合わせて一として、応答数の%を示してある。調査B(表5-2)では、4(いつも)、3(ときどき)、2(まれに)、1(まったくない)として応答数の%を示した。項目別応答率の三群相互間の差の有意性を χ^2 検定によって

表 5-1 家の宗教別応答数(%)—宗教的信念と信仰

高校生の宗教意識に関する研究(2) (石黒・酒井・山田)

因子	仏教 N=462			新宗教 N=89			無宗教 N=123			
	-	0	+	-	0	+	-	0	+	
信仰	1	45.7	40.0	14.3	39.3	47.2	13.5	51.2	42.3	6.5
	2	33.3	36.4	30.3	36.0	30.3	33.7	39.0	43.9	17.1
	3	72.5	22.3	5.2	62.9	29.2	7.9	65.0	30.9	4.1
	4	17.1	34.6	48.3	20.2	39.3	40.5	23.6	44.7	31.7
	5	46.1	49.8	4.1	41.6	53.9	4.5	56.1	39.0	4.9
	6	57.2	41.1	1.7	59.6	39.3	1.1	60.2	37.4	2.4
	7	39.0	50.0	11.0	40.5	44.9	14.6	48.8	43.9	7.3
	8	35.3	47.6	17.1	38.2	44.9	16.9	36.6	40.6	22.8
	9	30.3	47.6	22.1	31.5	39.3	29.2	29.3	47.1	23.6
	10*	21.9	53.7	24.5	28.1	56.2	15.7	29.3	54.5	16.2
	11	31.2	57.6	11.2	19.1	68.5	12.4	36.6	55.3	8.1
	12*	36.4	47.8	15.8	33.7	53.9	12.4	43.1	41.5	15.4
宗教的信念	13	12.8	42.2	45.0	7.9	41.6	50.5	13.0	48.0	39.0
	14	19.9	42.9	37.2	20.2	53.9	25.9	18.7	54.5	26.8
	15	47.2	17.7	35.1	34.8	14.6	50.6	43.1	31.1	35.8
	16	15.1	21.9	63.0	7.9	18.0	74.1	12.2	17.1	70.7
	17	26.2	40.7	33.1	19.1	37.1	43.8	21.1	36.6	42.3
	18	27.3	42.4	30.3	25.9	34.8	39.3	27.7	46.3	26.0
	19	24.0	43.5	32.5	15.7	49.5	34.8	24.4	43.9	31.7
	20	39.4	44.2	16.4	33.7	50.6	15.7	34.2	56.9	8.9
	21*	50.9	34.0	15.1	44.9	41.6	13.5	60.2	34.9	4.9
	宗教と科学	22	54.1	30.1	15.8	53.9	31.5	14.6	49.6	39.8
23		47.2	49.3	3.5	29.2	67.4	3.4	31.7	61.0	7.3
24*		13.8	19.3	66.9	21.3	23.6	55.1	19.5	23.6	56.9
24*		32.3	48.0	19.7	28.1	59.6	12.3	32.5	55.3	12.2

注. + 非常に賛成と賛成, 0 どちらでもない, - 非常に反対と反対, ただし*印は応答を逆転して示してある。

表 5-2 家の宗教別応答数(%)—宗教的実践

因子	仏教 N=462				新宗教 N=84				無宗教 N=123				
	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	
宗教経験	1	39.4	32.9	19.9	7.8	31.5	31.5	32.6	4.4	39.9	30.9	26.8	2.4
	2	36.8	35.3	21.9	6.0	29.2	32.6	32.6	5.6	43.9	35.0	20.3	0.8
	3	52.4	32.3	12.1	3.2	46.1	35.9	14.6	3.4	58.5	22.0	17.1	2.4
	4	43.5	30.3	20.4	5.8	33.7	34.9	27.0	4.4	48.8	30.9	17.1	3.2
	5	75.5	14.5	7.4	2.6	80.9	13.5	3.4	2.2	85.4	10.6	2.4	1.6
宗教的行為	6	78.8	15.8	4.8	0.6	78.6	16.9	3.4	1.1	83.7	13.8	2.4	0.0
	7	82.9	11.5	4.8	0.8	84.3	6.7	5.6	3.4	82.1	13.0	4.1	0.8
	8	67.3	18.4	11.0	3.3	78.6	16.9	1.1	3.4	68.3	15.4	9.8	6.5
	9	71.0	21.2	6.7	1.1	77.5	20.2	2.3	0.0	79.7	17.9	2.4	0.0
	10	63.9	26.8	7.8	1.5	53.9	33.7	10.1	2.3	56.9	36.6	5.7	0.8
	11	73.2	18.6	6.1	2.1	69.6	16.9	11.2	2.3	78.0	15.4	6.5	0.0
	12	79.7	12.8	4.1	3.4	70.8	20.2	7.9	1.1	77.2	11.4	7.3	4.1
呪術	13	31.4	25.1	27.7	15.8	39.3	20.2	25.9	14.6	49.6	25.2	17.1	8.1
	14	12.1	31.4	41.3	15.2	14.6	36.0	33.7	15.7	14.6	29.3	35.0	21.1
	15	11.3	27.7	47.2	13.8	12.4	28.1	46.1	13.4	10.6	22.8	53.6	13.0
	16	24.5	27.5	23.5	24.5	29.2	31.5	22.5	16.8	21.9	22.8	32.5	22.8

注. 4 いつも, 3 ときどき, 2 まれに, 1 まったくない。

表 6-1 家の宗教による宗教意識の差 注. 数字は χ^2 検定による有意水準を示す。

因子	項目	調査 A 宗教的信念と信仰	仏教： 無宗教		仏教： 新宗教		新宗教： 無宗教	
			>	.	<	.	>	.
信 仰	1	無神論は社会に有害	>	.02			>	.05
	2	信仰あれば安心して死ぬる	>>	.05			>>	.05
	3	祈りは問題解決を助ける	>>	.05				
	4	信心深い人は道徳的	>>	.001				
	5	信仰に迷う人の救済は義務	>>	.02				
	6	寺院の奉仕活動は楽しみ	>>	.02			>	.05
	7	寺院は人間関係をよくする						
	8	寺院は安息の場所						
	9	結婚式は寺院がよい			<	.02		
	10*	寺院は教義と迷信を押しつけ					>	.05
	11	寺院は社会正義のとりで						
	12*	寺院の救済活動は不十分						
宗教的 信念	13	神（仏）があると信じている						
	14	神，仏，天は偉大な力をもつ						
	15	一生は運命により決まる						
	16	死後にも魂が残る						
	17	天国（極楽）と地獄がある						
	18	神（仏）は信ずる人に報いる					>	.02
	19	神（仏）は慈愛をもって守る						
20	神（仏）の救いで自由になる	>	.02					
21*	信仰がなくても幸福はある	>>	.01			>	.05	
宗教と 科学	22	人は生まれつき罪深い						
	23	進化論は社会に有害である	<	.02	<	.01		
	24*	科学の進歩は神秘性を解消						
	25*	宗教は科学的思考に有害						

高校生の宗教意識に関する研究(2) (石黒・酒井・山田)

*は逆転項目

表 6-2 家の宗教による宗教意識の差 注. 数字は χ^2 検定による有意水準を示す。

因子	項目	調査 B 宗教的実践	仏教： 無宗教		仏教： 新宗教		新宗教： 無宗教	
			>	.	<	.	>	.
宗教 経験	1	神（仏）の存在を感じる			<	.05		
	2	神（仏）の助けを感じる					>	.02
	3	神（仏）の恐ろしさを感じる						
	4	神（仏）の罰を感じる						
	5	悪魔の誘惑を感じる						
宗教的 行為	6	友人や隣人と宗教を語る						
	7	家族に自分の宗教活動を話す						
	8	聖書や経典を読む			>	.05	<	.05
	9	事件と宗教の関係を考える						
	10	宗教団体の募金に応ずる						
	11	祭日などに寺院に行く						
	12	寺院の宗教行事に参加						
呪 術	13	宗教上のきまった日に墓参	>	.001				
	14	安全や入試合格を祈願						
	15	おみくじや占いをする						
	16	お守りやお札を身につける						

示したものが、表6-1、6-2である。

家の宗教が仏教の高校生（仏教群）は、無宗教群に比べて宗教的信念と信仰で1無神論は社会に有害、21信仰がなくても幸福はある、2信仰あれば安心して死ねる、20神仏の救いで自由になる、4信心深い人は道徳的、5信仰に迷う人の救済は義務、6寺院の奉仕活動は楽しみという七項目でまさり、宗教的実践では13宗教上のきまつた日に墓参という項目でまさっている。逆に無宗教群が仏教群にまさるのは3祈りは問題解決を助ける（信仰）、23進化論は社会に有害である（宗教と科学）の二項目だけである。

仏教群は信仰による救いと信仰に基づく宗教的活動に対してより肯定的であり、墓参などの祖先祭祀により多く積極的であるといえる。

家の宗教が新宗教の高校生（新宗教群）は、宗教的信念と信仰で1無神論は社会に有害、21信仰がなくても幸福はある、2信仰あれば安心して死ねる、18神（仏）は信ずる人に報いる、6寺院の奉仕活動は楽しみ、11寺院は社会正義のとりでという六項目で無宗教群にまさり、また宗教的実践で2神（仏）の助けを感じるといふ項目でもまさっている。逆に無宗教群がまさるのは8聖書や経典を読むの一項目だけである。

高校生の宗教意識に関する研究②（石黒・酒井・山田）

る。

新宗教群は信仰による救いと信仰に基づく社会的宗教的活動に意義を見出しており、神（仏）による援助を感じる（体験）ことがより多いといえる。

次に仏教群と新宗教群を比べると、仏教群の方が8聖書や経典を読む（宗教的行為）ことが多く、新宗教群の方は9結婚式は寺院（教会）がよい（信仰）、23進化論は社会に有害である（宗教と科学）という意見をより多く支持し、また1神（仏）の实在を感じる（体験）がより多いのである。

仏教群と新宗教群は宗教的信念と信仰において、かなりの共通性があるが、仏教群の方はやや個人的観点が強く、新宗教群の方は社会的観点が強く寺院（教会）との世俗的な関わりを求める反面、宗教経験（体験）をもつことが多いようである。仏教群では逆に経典を通して信仰に近づく傾向がより多くみられる。ここに先祖供養を中心として伝統的な宗教儀礼に重きを置く仏教の家庭と、生活に密着した社会的宗教的活動を進めることの多い新宗教の家庭の宗教的環境の影響の差異が現われているように思われる。

これに対して家の宗教について関知しない無宗教群は宗教的実践の呪術（項目14・15・16）において他の二群と同じか

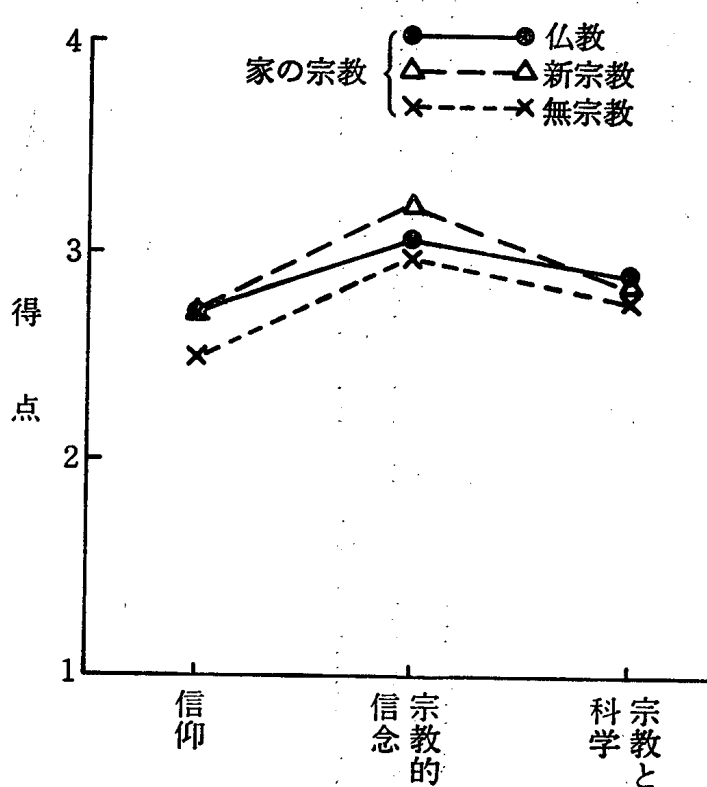


図1 宗教的信念と信仰

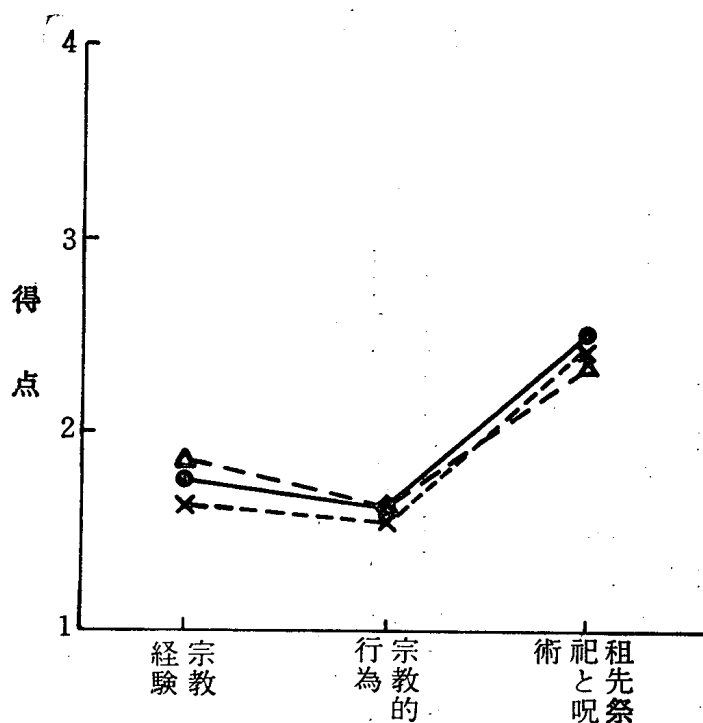


図2 宗教的実践

点)、非常に反対(1点)とし、逆転項目にあつてはその逆に点を与える。調査B(宗教的実践)については、いつも(4点)、ときどき(3点)、まれに(2点)、まったくくない(1点)とした。図1によると仏教群は信仰に

それ以上に多く実行している。これと信仰の項目3「祈りは問題解決を助ける」の支持の高いことを結びつけて考えると、無宗教群の高校生は呪術と祈禱によって現世利益をもたらそうとする呪術—宗教的信仰の保持者であるように見える。A23「進化論は社会に有害である」(宗教と科学)という意見の支持率が仏教群よりも高いことは、それが反宗教に

徹しているのではないことを示している。

(ロ) 因子別各群の比較

各調査項目を得点化して因子別に集計して平均値を求め、図示したものが図1と図2である。

調査A(宗教的信念と信仰)の応答においては、非常に賛成(5点)、賛成(4点)、どちらでもない(3点)、反対(2

において無宗教群より高いが、宗教的信念においてはあまり差がない。新宗教群は宗教的信念において最も高く、信仰においても仏教群と同様に無宗教群より高くなっている。宗教と科学については三群間にほとんど差がみられない。

図2の宗教的实践においては、祖先祭祀と呪術が三群ともに著しく高く、相互の差はわずかである。宗教経験はやや低いが、中では新宗教群が最も高く、仏教群・無宗教群の順となっている。宗教的行為は三群間にほとんど差がなくて最も低い。

これを個別項目の応答結果と総合してみると、仏教群の高校生は家の祖先祭祀を契機として經典に親しみ、信仰を深める傾向はあるが、さらに進んで宗教的信念と信条を固くし宗教経験（体験）を重ねるにはやや足りないものがあるようである。これに対して新宗教群の高校生は家の社会的宗教的活動を契機として寺院（教会）に親しみ、宗教的信念や信条を強固にして信仰を深め、宗教経験（体験）をもつ機会を多くするように見える。無宗教群の高校生は家の宗教に関知しないというだけで、確固とした反宗教的信念や信条を持つわけではなく、安全や入試合格などへの願望を直接呪術や祈禱に頼ってもたらそうとする呪術―宗教的信仰の段階にとどまっ

高校生の宗教意識に関する研究(2) (石黒・酒井・山田)

ているとみるべきである。

四、要約

この研究は高校生の宗教意識について、高校生自身が認知している家の宗教との関係を質問紙調査によって明らかにすることである。そのため、まず質問紙によってとらえられた宗教意識の因子構造を明らかにし、その各因子を構成する質問項目によって、家の宗教に基づいて分類された仏教群、新宗教群、無宗教群の三群の比較を試みた。調査対象は愛知・奈良・東京三都県五高校の生徒七六六名（男子三五八名、女子四〇八名）である。調査期日は一九八三年三月―一九八五年二月。質問項目は宗教的信念と信仰に関する調査A二五項目、宗教的实践に関する調査B一六項目合計四一項目である。

因子分析の結果、調査Aから「信仰」「宗教的信念」「宗教と科学」の三因子、調査Bから「宗教経験」「宗教的行為」「祖先祭祀と呪術」の三因子がそれぞれ抽出された。因子別に三群を比較すると、仏教群と新宗教群は信仰で共に高く、新宗教群はとくに宗教的信念で高い。宗教経験では新宗教群が最も高く、無宗教群が最も低い。また祖先祭祀と呪術は三

高校生の宗教意識に関する研究(2) (石黒・酒井・山田)

群共に著しく高いが、墓参については仏教群が最も高い。

仏教群は家の祖先祭祀を契機として經典に親しみ信仰を深めるが、宗教的信念を固めるにはいくらか足りないように見える。新宗教群は家の社会的宗教的活動に触発されて寺院(教会)に親しみ、宗教的信念を固めて信仰を深め、宗教経験(体験)をもつことが多いと考えられる。無宗教群は家の宗教に関知しないで、反宗教的信念を堅持するというのではなく、呪術や祈禱に願望の充足を託する呪術―宗教的信仰の持主であるともみることができる。

付記

この研究の実施にあたり、調査対象校の鵜飼泰勇・東隆真・林博明・加藤十八・刀根文雄・森幹夫・上田敏見・今岡正自の諸先生並びに生徒諸君から理解あるご援助・ご協力をいただいた。ここに記して感謝の意をあらわしたい。

〔参考文献〕

石黒鈺二・酒井亮爾(一九八四) 青年の宗教意識に関する日米比較

研究、愛知学院大学人間文化研究所紀要、「人間文化」創刊号、

一一二四

石黒鈺二(一九八五a) 児童青年の宗教意識における性差と地域

差、愛知学院大学文学部紀要、第一四号、一一二八

石黒鈺二・酒井亮爾・山田ゆかり(一九八五b) 高校生の宗教意識

に関する研究―宗教教育の効果―、愛知学院大学禅研究所紀要、

第一四号、三〇三―三二二

石黒鈺二・許心華・酒井亮爾・山田ゆかり(一九八六a) 児童青年

の宗教意識における性差と地域差―台湾の場合―、愛知学院大学

人間文化研究所紀要「人間文化」第二号、六〇―九五

石黒鈺二・酒井亮爾・山田ゆかり(一九八六b) 青年の宗教意識に

関する研究―日本とカナダの比較―、日本教育心理学会第二八回

総会発表論文集、五〇―五一

増谷文雄編(一九七五) 現代青少年の宗教意識、鈴木出版